

ワケ カタチには理由がある(14)

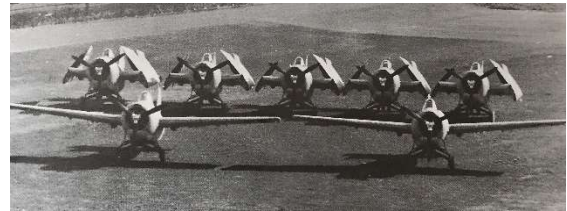
～F4F-4 ワイルドキャット(Wildcat)艦上戦闘機



出典：「Picture History of American Aircraft Production」 ↓



Dover Publishing



本機は、1937年に原型が初飛行した、第二次世界大戦の米国海軍の戦闘機です。太平洋戦争緒戦において零戦の敵役でした。日本人の目から見ると、お世辞にもかっこいいとは言えない機体ですが、胴体に着陸装置を有し、タフな着艦にも耐える質実剛健な機体でした。一対一では同機に分はなかったものの、2機で対抗する「サッチ戦法」が考案されて零戦に対抗しました。サブタイプ-4の特徴は、折り畳み翼です。主桁に斜め後方に回動ヒンジを配置することで、その先の主翼を90度捻って胴体側面後方に折り畳める構造を有していました。「ネズ爺&ハテナンの特許探偵団 Vol.6」で取り上げたように起業の際に上記脚構造の特許を取得したグラマン社のこと、この発明も、当然に特許出願したと考えられますが、過去に他に実施された公知例があったのでしょうか、特許発明とはいっていないようです。しかし、実用的には大変優れた発明で、「five-into-two」のキャッチフレーズのように、幅方向において(主翼を折り畳まない)2機のスペースに(主翼を折り畳んだ)5機を収納でき、小型の護衛空母での運用を可能にしました。この発明は、同社のTBFアベンジャー攻撃機やF6Fヘルキャットにも採用されています。

【模型について】

英国のエアフィックス社(Airfix)1/72のインジェクションキットです。このキットの売りは、折り畳み状態と展開状態を選択して組み立てることができることです。せつかくなので、ネオジム磁石を使って、差し替え式で両状態を替えられるように組んでいます。日本人は、どうしても零戦最良にならざるを得ないですが、模型を作ってみると、この折り畳み機構も含め、改めて「競争に勝利するための合理的な設計思想」が感じられ、味のある機体だと感じます。(中川裕幸 2021年4月)